



教育ななめ読み ③76 「それでも白熱授業は良いのか」

教育評論家 梨戸 茂史

明治の文明開化以来、日本の「西

洋かぶれ」は変わっていないようだ。高等教育の世界も、常に欧米、最近では学問の最先端、アメリカの大学を意識し何でもあちらが優れているとか、背景を見ないで真似しようとする。世界ランキングなんて気にし過ぎて、前提条件の違いを無視して落ち込んだり、ランクアップに汲々としている。そこで、目からうろこの本を紹介したい。

『教えてみた「米国トップ校」』（東京大学東洋文化研究所佐藤仁教授著）である。

佐藤先生は、実際にプリンストン大学で教えてきて内部から、同校と母校東大を比較した。

まずは、入試の話。米国の一流校は「入るのは易しく、出るのは難しい」という評価は、迷信だと言う。第一に、ハーバードで合格率が五・二％、プリンストン六・一％。後者の場合、三万通の応募に合格者は一八〇〇人、九五％の応募者が不合格になる。そして合格者の三割が他大学に逃げるので一流大学合格者がいくつ掛けた状態か、多くの志願者にとってはさらに狭き門になる。これでは入りやすいとは言え

まい。

入試に絡んだもう一つの迷信というか「神話」になっているのが「人物重視、マイノリティを入れる多様性の確保」の話。

そもそも「レガシー」入試というのがあって、卒業生の子弟や当該大学の教職員の子弟が優先されるシステムがある。私立で寄付を集める都合上有益な方法だが、わが国では非難ごうごう、少しも平等とは言えない。

また、「人物」入試の導入の理由には裏のストーリーがある。かつて、学力だけの入試を実施して成績のいいユダヤ系が増えたそう。一方、名門大学の方は、将来の国家のリーダーとして「アングロサクソン系で正当なプロテスタント」の学生を教育するという使命を掲げており、ユダヤ系を大きく増やすわけにはいかなかった。そこで編み出したのが品格、社会性、リーダーシップというあいまいな基準であり、人物重視を取り入れ、大学が自らほしいと思う学生を採れるようにしたことからはじまったという。地理的多様性を掲げたイェール大は、ユダヤ人の多いニューヨークからの入学者を間接的にかつ意図的に抑制したそう

だ（社会学者のジェローム・カラベルの研究（同著））。黒人や女子学生への門戸開放だって、男子学生が、女子のいる大学に流れることへの対抗措置だったりする。決して理想ばかりじゃあないよということだ。

次は、ハーバードで有名になった「白熱教室」。先生いわく「日本人が考える米国の大学の授業内容は、イメージが先行している。すべての授業が対話型で進められているわけではなく、多様性に富むわけでもない」。ノーベル賞学者の講義だって「著名な先生だが講義はダメだ」という評価もあったりする。学生が多い科目は五〇分の授業二回のほかプリセプトという少人数ゼミがありそこで理解を補う。また、すべての科目が討論に適しているわけではない。もちろん、答えが決まっていない題材は他のいろいろな意見を聞くことで、理解が深まる側面はあるだろう。でも中には、「他人の発言をうまくつないで、あたかも課題文献を読んだふりをして参加点を稼ごうとする学生が多い」という学生のクレームも紹介されている。

最近では留学した経験者や客員教授の日本人の先生もいるでしょう。このような率直な発言はあまり見当たらないのはなぜでしょう。米国の一流大学を絶賛するあまり、悪い点が見えないこともあるのだろうか。ご意見を伺いたい（なお、「文芸春秋」十八年二月号に吉見俊哉ハーバードの客員教授のエッセイの肯定論もある）。